

フィールドスタディー(平成26年.春) シリーズ講座 郷土の歴史を学ぼう

平成26年度大東文化大学春期オープンカレッジ(東松山校舎)

# 古墳時代のまつりと延喜式内社

—式内社と博物館の踏査及び見学—

引率講師：坂本 和俊 先生(講座講師)

☆日時	平成26年6月14日(土) ※雨天決行
》集合場所	◎第一集合地 東松山校舎・管理棟前駐車場9:00集合 ◎第二集合地 東上線高坂駅西口朝日興産前9:10集合 ※フィールドスタディーの参加・不参加、及び集合地を6月7日(土)までにご提出ください。 (当日不参加になった場合は必ずセンターにご連絡ください。)
》昼食	各自必ずご持参ください。
》日程(予定)	9:00東松山校舎出発→9:10高坂駅出発→(休憩:上里SA)→小祝神社・三島塚古墳(三島神社古墳)→甘楽古代館(昼食)→富岡市立美術館・福

沢一郎記念美術館→貫前神社→高坂駅着（17：00）→大東文化大学東松山  
校舎

※集合地で富岡市立美術館・福沢一郎記念美術館の入館料210円（65以上  
の方は100円）を収集します。お釣りのないようにお持ちください。

※道路状況他により予定時間通り行かない場合があります。

予めご了承ください。

》同行

広沢 晶子・高田 綾（地域連携センター）

》観光バス

東栄観光

★通常の講座とは時間が異なります。ご注意ください。

## 大東文化大学東松山地域連携センター

電話：0493-31-1534



小祝神社  
おぼり

高崎市石原町所在の延喜式内社「小祝神社」の標柱





ここが小祝神社



【延喜式(えんぎしき)】 延喜五(九〇五)年に編さんを開始。平安初期の律令の施行細則を記している。そのうちの神名帳に上野国十二社中、片岡郡の一座として小祝神社が挙げられている。延喜式に記載されている神社は「式内社」と呼ばれ、国家の守護神として国の神祇官(しんぎかん)、国司が神社にもうで、祭った。(小祝神社ホームページより)

社殿が見える





現在の社殿は江戸時代中期の造営という



左手に説明板が立っている





# 小祝神社

小祝神社は片岡の鎮守として、また安産・子育て  
守護神として崇敬篤い社である

神社の創建は不詳であるが、元慶四年（八八〇）  
に正五位が贈られ、延長五年（九二七）の延喜式  
神名帳に上野十二社の第七社に加えられており、  
その時からても千年以上たっている。

祭神は、「少彦名命」で医薬及び穀霊神である  
ところからこの土地の豪族が、悪疫退散・五穀豊  
穰を祈願して建立したものと思われる。現在の社  
殿は江戸時代の正徳年間、高崎城主 間部越前守  
詮房により造営されたものである。

四月と十月の祭典には、神楽が奉納され多数の  
参詣者で賑わう。

境内には、  
「しばらくは 花の上なる月夜かな」  
の芭蕉句碑がある。

社団法人 高崎観光協会



社殿(附 棟札・奉納額・寄進銘)が高崎市の指定重要文化財となっている



小祝神社は『延喜式神明帳』に記載された小社で上野国一二社(式内社)の一つである。主祭神は少名彦命である。現在の小祝神社社殿は拝殿・幣殿と本殿が一体となっている。しかし、拝殿と幣殿は後から建てられたものであり、本殿は建設当初は単独で建っていた。

間部家文書と奉納額により、正徳三年(一七一三)に建て替えの企画が始まり、享保二年(一七二七)に上棟したことが明らかである。また、棟札と彫刻パネルの墨書より、享保元年に起工し、享保五年には竣工していたと推定できる。棟札によれば大工棟梁は大塚彦平、木挽は高橋嘉助であり、共に高崎町住である。

当本殿は、三間社入母屋造、側面三間で向拝三間を付ける。屋根は銅板葺(当初は檜皮葺または柿葺)とし、軒は二軒繁垂木とする。向拝は海老虹梁で繋ぎ、手鉾を付ける。大床を正側背面の四方に廻し、脇障子を立てる。内部は前方二間を外陣、後方一間を内陣とし、内陣に厨子を安置する。

背面の一部とはいえ、建造当初から壁面に彫刻パネルを嵌め込む例として現時点では県内最古である。当本殿は高崎市における文化財指定の神社本殿建築として最古であり、また、彫刻パネルを嵌め込む建物の年代判定の指標となる建物として貴重である。

所在地 高崎市石原町一二四七  
指定 平成一四年二月二〇日



正面が拝殿、右手奥が本殿



こんな看板も立っていた

# 小祝神社甚句 上州相撲甚句会

アードスコイ ドスコイ  
 アードスコイ アードスコイ  
 アードスコイ ドスコイ  
 小祝神社を 甚句にとけば ヨー  
 アードスコイ ドスコイ

アードスコイ アードスコイ

大和 上古の 東国で  
 随一 栄えし 上毛野  
 和銅 四年 多胡の碑に  
 片岡 郡名 刻まれり  
 実録 小祝の神に  
 正五位 上の 七之宮  
 延喜式 内の 命なり  
 祭神 少彦名の 歴史あり  
 千余なる 総鎮守  
 片岡 郷の 半田祭連  
 奉納 御神楽 三組あり  
 奉納 獅子舞 寺尾連  
 乗附 清水 句碑も  
 正風 宗師 花の上なる  
 志ばら 心の 御参詣  
 崇敬 豊穰 御繁盛  
 五穀 息災 ヨー  
 無病 アードスコイ  
 アードスコイ ドスコイ  
 アードスコイ ドスコイ

平成二十年四月十九日

荻野 守



参考ホームページ

[http://www.genbu.net/data/kouzuke/obori\\_title.htm](http://www.genbu.net/data/kouzuke/obori_title.htm)

<http://www.raijin.com/obori/index.html>







## 三島塚古墳

ここは小祝神社から歩いてすぐの三島公園/正面前方の高まりが三島塚古墳で公園の中に保存されている



北東側から見たところ/二段築成の円墳/5世紀後半の築造とされる





南東側から見たところ





南面には墳頂に建つ三島神社の鳥居が立っている/右手は三島塚古墳の標柱





境頂に登ってみる





境頂に建つ三島神社社殿





社殿の背後の状況を見る



社殿の背後から正面方向を見たところ/さまざまな石造物もある





説明板が立っている





## 高崎市指定史跡

### 三島塚古墳

烏川右岸（西岸）の低い段丘上にあつて、小坂山の北東に位置しています。

幅十四段もある幅の広い、深い周堀をめぐらした直径五十八段、高さ五・五段もある大きな円墳で、二段に築かれ、規模に対して頂上が広く、高さの比較的低い、特色のある墳丘です。表面には葺石がほとんどこされ、埴輪も配列されています。

『上毛古墳総覧』によると、石棺が出土したことがあり、明治二十七年発掘されて、鏡や刀、勾玉など出たようですが、その所在は不明です。五世紀後半の築造と推定されています。

昭和十年の県下一斉古墳調査の時に、この周囲から観音山丘陵の東斜面にかけての石原、寺尾地区で七十六基の古墳が確認されましたが、これらの中心となる首長の古墳と考えられます。

古くから彦狭島王の墓との伝えがあり、頂上には三島神社が祀られています。古墳の呼び名は、これから名付けられたものでしょう。





ご覧の通り、鳥居の真ん前に建物が建ってしまっている





古墳の周りを回ってみる/幅14mもの周堀が巡っていたというから、まさしくこの道路の部分もこんな感じの周堀であったのであろう





正面の遺構は後世のものかもしれないが、このように墳丘が葺石で覆われていたようだ





周堀の外周は公園のスペースとなっているようだが、周堀の雰囲気は感じられる





さて、公園のすぐ北側のこちらの住宅の辺りには、石原坊主山古墳(方墳)があったという



参考ホームページ

[http://sgkohun.world.coocan.jp/archive/index.php/takasaki\\_misima/](http://sgkohun.world.coocan.jp/archive/index.php/takasaki_misima/)

<http://blogs.yahoo.co.jp/citizen8823/11331306.html>

[http://tigerdream.no-blog.jp/special/2012/07/post\\_4fb2.html](http://tigerdream.no-blog.jp/special/2012/07/post_4fb2.html)

<http://members3.icom.home.ne.jp/nekonyanhakase/ishr.html>

[http://blogs.yahoo.co.jp/kamitukeno\\_k/59814392.html](http://blogs.yahoo.co.jp/kamitukeno_k/59814392.html)





甘楽古代館

群馬県甘楽郡甘楽町 所在

ここが「甘楽ふれあいの丘」にある甘楽古代館





校倉造風の鉄筋コンクリート造の建物となっている







これは古墳時代(後期)の住居の柱



こふんじだい こうき じゅうきょ ほしら  
古墳時代（後期）住居の柱

やく ねんまえころ いちばんした お おん  
約1450年前頃の住居の柱で、一番下の部分です。

み ところ そこ ちょうな だいく どうぐ  
見えている所が柱の底になります。手斧（大工道具

の一つ）により整形されたあとがよくわかります。

しもこづか  
下小塚遺跡（陸上競技場）





さて、広場には古墳を模した円墳があった





石室も造られている





周堀の感じが出ている







これは同じく「甘楽ふれあいの丘」にある甘楽のカラス天狗像







## 甘楽のカラス天狗

カラス天狗は、山の守護神といわれる天狗の中で、最も古典的な巨鳥カルラの姿をまとっている。カルラは、もともと古代インド神話に登場する鳥の王であったが、日本固有の山岳信仰や民話と結び付きながら、今日まで伝えられてきた。こうした歴史的背景をふまえ、甘楽ふれあいの丘を守る象徴として、正義の剣を抱くカラス天狗像を制作した。この像は日本一を誇るものである。

高さ3m 重量約1,300kg

1994年 作 小島廣志

制作 KOBATAKE工房

建立 甘楽町



富岡市立美術博物館

富岡市黒川 所在

ここが富岡市立美術博物館/モダンなデザインの建物となっている



参考ホームページ

<http://www.tak-archi.co.jp/tomioka-city-museum/>





### 貫前神社の展示もあった

**貫前神社式年遷座祭**

毎年、御祭日(10月23日)に、伊弉諾大神・伊弉册大神の御遷座を奉迎する。御遷座は、伊弉諾大神(おんつらぬかのみこと)と伊弉册大神(おんつらぬかのみこと)の御遷座の儀式を指す。伊弉ノミコト(おんつらのみこと)の御遷座の儀式は、伊弉諾大神(おんつらぬかのみこと)と伊弉册大神(おんつらぬかのみこと)の御遷座の儀式を指す。





**平安時代の主な神社**

平安時代(794-1185)には、伊弉諾大神(おんつらぬかのみこと)と伊弉册大神(おんつらぬかのみこと)の御遷座の儀式が行われた。伊弉ノミコト(おんつらのみこと)の御遷座の儀式は、伊弉諾大神(おんつらぬかのみこと)と伊弉册大神(おんつらぬかのみこと)の御遷座の儀式を指す。



**ノ宮貫前神社**

貫前神社は、平安時代、上野国内でもっとも高い神階を与えられた神社で、平安時代の主要な神社を記した『延喜式』の神名帳には、大社として記載されています。中世・近世にも、その名が広く知られ、多くの武将の崇敬を受けてきました。現在の社殿は江戸時代、徳川家光によって再建されたものです。



**貫前神社と関わりの深い神社**



**石橋**

石橋は、平安時代の重要な交通手段であり、伊弉ノミコト(おんつらのみこと)の御遷座の儀式にも重要な役割を果たしました。伊弉ノミコト(おんつらのみこと)の御遷座の儀式は、伊弉諾大神(おんつらぬかのみこと)と伊弉册大神(おんつらぬかのみこと)の御遷座の儀式を指す。

貫前神社の鏡と上野国神名帳





これは富岡市立美術博物館の入口近くに展示してあった上信電鉄の大正時代の電気機関車







富岡市指定重要文化財

## デキ型電気機関車2号機

平成19年9月29日指定

大正13年（1924年）、当時の「上信電気鉄道株式会社」が路線の電化に際し、他の1号機・3号機とともにドイツから輸入した電気機関車のうちの1両です。現在の<sup>こゝ</sup>上信電鉄株式会社は、明治28年（1895年）「上野鉄道株式会社」として軽便鉄道で創立されましたが、その後、大正10年（1921年）社名を「上信電気鉄道株式会社」と改め、路線を電化し輸送力の強化を図りました。

この2号機は、平成6年（1994年）上信電鉄株式会社が鉄道貨物輸送を廃止したことにより富岡市に寄贈されました。

大きさは、全長9.18m、幅2.675m、高さ3.874m、重量は34.54t、特徴的な凸形の車両で、製造会社はドイツの「シーメンス・シュッケルト電気株式会社」で、車体はやはりドイツの車輛製造会社「マン社」製です。

多くの鉄道ファンからも「上州のシーラカンス」の愛称で親しまれ、上信電鉄株式会社の電化当初から輸送の原動力として、地域の経済・産業の発展に多大な貢献をしてきた貴重な近代化遺産です。

富岡市教育委員会





貫前神社  
ぬきさきじんじゃ

富岡市一ノ宮 所在

ここが貫前神社/前方は総門





延喜式内社  
一之宮貫前神社 上野国一之宮

旧園幣中社

御祭神

経津主神 建国の神 天孫物部皇祖神

磐火神 御祭本宮 当地方の神 河津神 長尾皇祖の神

御創建

今より千四百五十年、聖徳太子天皇（百五十二）に  
磐火神御祭式により、建つた宮に祀らる。

御社殿

清川三門御祭式による寛永十二年（西暦一六三五年）の遷宮  
御祭本宮の建つて東山法皇（村山）御祭本宮を遷宮

境内

この境内には、延喜式の内社として、  
延喜式の内社として、三尊御祭神、神代御祭神時代の御祭神が御祭

祭儀

この境内には、延喜式の内社として、  
延喜式の内社として、三尊御祭神、神代御祭神時代の御祭神が御祭

- 奉心祭儀
- 一月 一日 歳旦祭
  - 全 三日 元始祭 水の神事
  - 全 七日 土弓矢土火刀神事（見送治）
  - 全 十五日 高揚神事
  - 二月 十七日 農耕御祭
  - 三月 十四日 奉奉御祭
  - 全 十五日 例大祭
  - 六月 二十日 大袈式
  - 十一月二十日 新穀御祭
  - 十二月 一日 御神遊御祭
  - 全 八日 川瀬御祭 長尾神事
  - 全 十一日 御歳成御祭
  - 全 十二日 奉奉御祭
  - 全 二十一日 大袈式 夜夜祭

式年遷宮 十二年葺の御遷宮祭  
申年十二月十二日 仮殿遷座祭  
酉年 三月十三日 本殿遷座祭



上野国の一之宮/上記の看板には延喜式内社と記載があるが？



唐銅製燈籠/富岡市指定重要文化財/江戸時代末の製作





富岡市指定重要文化財

## 貫前神社唐銅製燈籠

平成九年四月二十三日指定

高さ約三九五センチの一对の銅製燈籠で、慶応元年（一八六五年）製作、慶応二年にここに建てられた。

燈籠の基礎部と竿部さおぶの間に、燈籠建立の際の献納者名・居住地・献納額が二段に刻まれている。

献納者の人数は合計で一五四四名、献納額は総額四七九〇両にのぼり、地元の多数の養蚕農家をはじめ、上州・江戸・横浜の生糸・絹商人らが献納している。

本県をはじめ、周辺各地における養蚕・製糸業の繁栄興隆と、これに携わる人々の祈念を明確に示す資料として重要であり、七年後に開業した旧富岡製糸場の先駆的記念碑ともいえる貴重な文化財である。

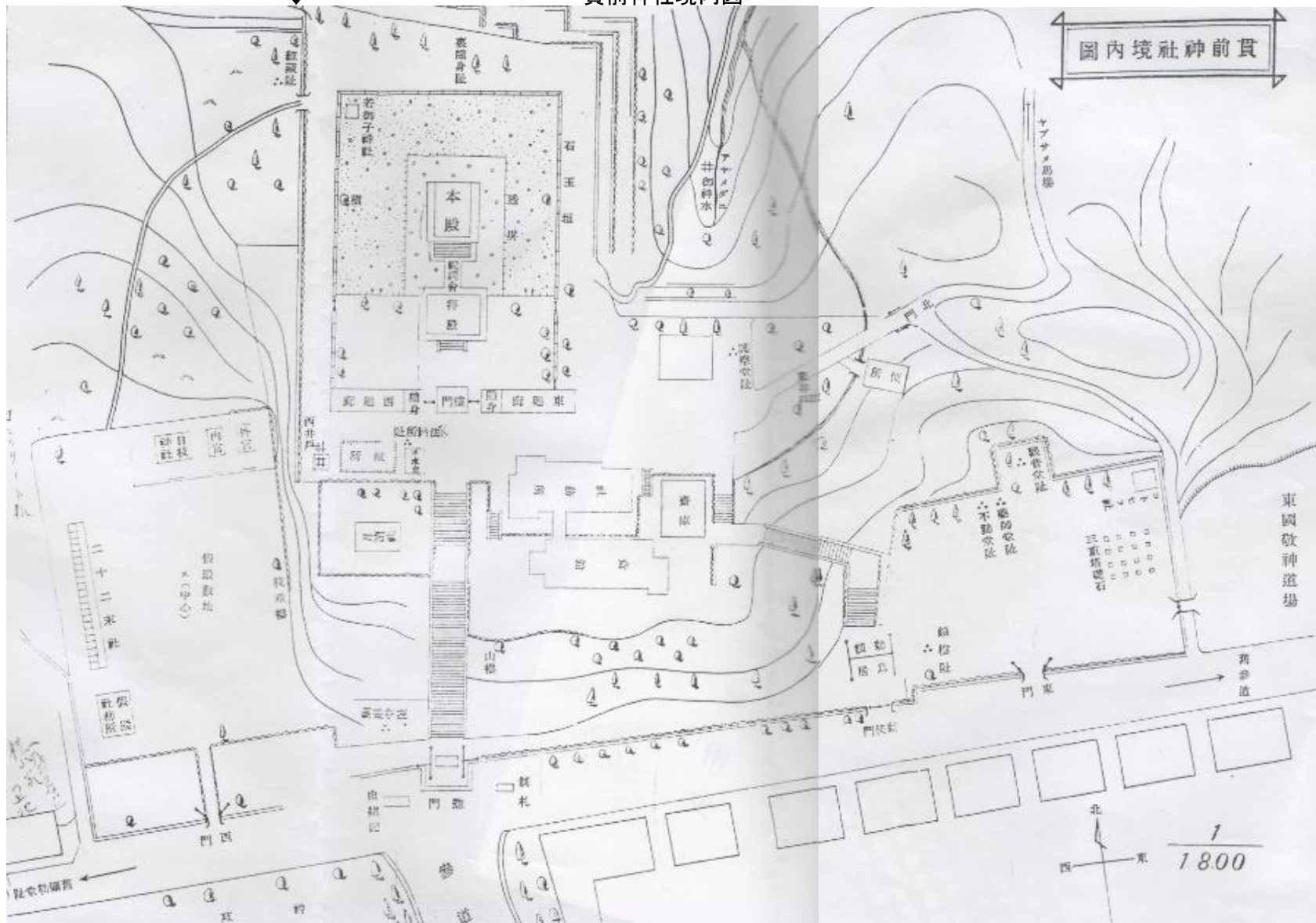
富岡市教育委員会

経蔵址

貫前神社境内図

貫前神社境内図

仮殿敷地





社殿へは総門から下って行く



これは楼門





振り返って総門を見たところ/この両サイドにも建物がある





右手の月読神社





末社まつしや「月読神社」つきよみじんじや

月読神社の現在の社殿は、寛永十二年以前の旧御  
本社拜殿を牛王堂として使用し、明治維新以後、  
月夜見命をお祀りして月読神社と改称した。明治四  
十一年、近在の氏神である社久司神社（秋畑琵琶澤）  
雷電神社（秋畑二ツ石）、湯前神社（秋畑裏根）  
近戸神社（富岡市野上）の各社を合祀した。  
月夜見命他十七柱の神々をお祀りしている。

左手の齋館





社殿/手前が拝殿、右奥が本殿/本殿、拝殿、楼門、東西回廊が国指定重要文化財にされている/江戸時代初期の建立





これは本殿の妻のアップ/「雷神小窓」という雷神を描いた小窓が設けられており、珍しいものらしい(正面の四角い部分か)





# 社 殿

(本殿、ほんでん 拜殿、はいでん 楼門、ろうもん 東西廻廊、とうさいかいろう)

現在の社殿は徳川三代将軍家光公の命による寛永十二年(一六三五)の造営である。

「元禄十一年(一六九八)五代将軍綱吉公の命により大修理した」江戸初期の極彩色総漆塗の精巧華麗な造りであるだけでなく、本殿の構造が単層二階建の俗に「貫前造」という当社独特の社殿形式と「雷神小窓」と称す小窓が設けられていることから、明治四十五年旧国宝、昭和二十五年国指定重要文化財に指定されている。拜殿、楼門(昭和五十一年国指定重要文化財に追加指定)及び東西廻廊は、同時代の建築である。

## 摂社「抜鉢若御子神社」

抜鉢若御子神社は安閑天皇の御代に現われたと伝え上野国神明帳に従五位抜鉢若御子明神と記載されている。明治三十八年に一ノ宮字若宮の地より現在地に遷座され、現在の社殿は棟札によると文化十二年の建立と伝う。



本殿の背後から見たところ/右手は抜鉾若御子神社





摂社「抜鉾若御子神社」/1815年の建立





さて、これは社殿の左側にある「経蔵址」と記された石柱





この辺りが経蔵址で礎石らしきものが散在している/正面に説明板が立っている





経きよ蔵ぞう址あと

経蔵の建設年代は詳らかでないが、明治維新の廃仏毀釈により破却され、所蔵の鎌倉以来の諸経や安置してあった普賢菩薩、両童子像等も北麓の高田川の河原に運び出して焼却したという。規模は残存の礎石から間口五間、奥行五間半ぐらいと推測される。



これは社殿左手の高台部分にある仮殿敷地に建つ境内社群





左手は末社「日枝神社」、中央は末社「伊勢内宮」、右手は末社「伊勢外宮」





## 末社「日枝神社」

日枝神社の現在の社殿は寛永十二年以前の旧御本社の本殿を移築したと伝わる。明治四十二年に近在の氏神である和合神社（田島）、諏訪神社（宇田）大臣神社（坂井）各社を合祀、大山咋神、他十七柱の神々をお祀りしている。

## 末社「伊勢内宮、外宮」

内宮、外宮は古くは境内の天狗沢峰通り字伊勢屋敷に鎮座していたものを寛永十二年に現在地に遷座したと伝わる。伊勢内宮は天照大神、伊勢外宮は豊受大神をお祀りしている。

## 二十二末社

社領内各地に鎮座していた二十二の末社を寛永十二年御本社の御造営の際に、一棟の社殿にお祀りしたことから二十二末社と称す。



正面が二十二末社





これはそこから社殿のある一帯を見下ろしたところ



境内には他にも神仏習合時代の三重塔跡礎石や観音堂跡、薬師堂跡などの痕跡(すべて破却)も残されていたが(前掲の境内図を参照)、現在は付近に宝物館が建っている

## 参考ホームページ

<http://nukisaki.or.jp/>

<http://www.gunma-navi.net/hatsumoude/72010018.html>

<http://ameblo.jp/morikichi92/entry-10994491295.html>

<http://shrine.s25.xrea.com/kouzuke1.html>

<http://www.omiyasan.com/other/post-215.php>

[http://www.genbu.net/data/kouzuke/nukisaki\\_title.htm](http://www.genbu.net/data/kouzuke/nukisaki_title.htm)

<http://www.ichinomiya.gr.jp/035.html>

<http://4travel.jp/travelogue/10678299>

<http://blogs.yahoo.co.jp/gura231tims/37555379.html?from=relatedCat>

<http://kagura999.ikaduchi.com/newpage10nukisaki.html>

<http://blog.goo.ne.jp/noyamany/e/953c3b0e08b28a698a9ff3578eb1a2e4>



